

「内藤湖南展」開催にあたって

小林 弥生子

平成8年4月から5月にかけての約2カ月間、博物館企画展として「東洋史学の泰斗—内藤湖南—」展を開催した。折しも、関西大学100周年を記念して湖南の蔵書及び遺愛品が本学に寄贈されてから10年が経とうとしている時である。

以前（昭和60年4月～5月、本学総合図書館開館披露記念、於 図書館展示室）にも、本学所蔵内藤文庫の善本、稀覯書、軸物、刻字甲骨等約40点が展示公開されたが、今回は従前に展示した資料の中から12点を選びすぐり再度公開した。その他、湖南遺愛の文房具や家族集合写真、諸々の記念写真を加えて、「内藤湖南」像をより身近に表すことをテーマとした。

内藤湖南は慶応2年（1866）8月、秋田県鹿角市十和田毛馬内に内藤調一（号、十湾）の次男、虎次郎として生まれる。

1885年（昭和18年）に秋田師範学校高等師範科を卒業後しばらくは教師をしていたが、1887年（明治20年）、22歳の折に親に無断で上京。『明教新誌』記者や数々の機関誌の編集者、『大阪朝日新聞社』の記者等を経て、1907年（明治40年）10月京都帝国大学文科大学講師、1909年（明治42年）9月同教授となり、東洋史学第1講座を担当し、多くの俊秀を育てた。京都帝大退官後の1927年（昭和2年）に隠棲の地として京都府相楽郡瓶原村に「恭仁山荘」を設け、いささかも衰えずに研究と指導に励んだと伝えられる。「恭仁山荘」は、その後、湖南の蔵書・遺愛品と共に関西大学の所有するところとなり、改装の後、研修施設として利用されている。当時の面影を伝えるものとして「書庫」がそのままの状態に残されているが、稀代の書誌学者であり、大蔵書家でもあった湖南の書庫はほとんど伝説的存在であったという。

湖南は、家庭では四男五女の子宝に恵まれた。長男乾吉氏（号 伯健。1899—1978）は、東洋法制史学の基礎を築いた碩学である。本学「内藤文庫」の中には伯健氏の蔵書も多数含まれており、湖南の死後、『内藤湖南全集』全14巻をま

とめあげたことでも有名である。

さて、この企画展に先立ち、「内藤文庫」として寄贈された蔵書の管理を行っている本学総合図書館のご協力により、展示品調査を行う機会があったが、その膨大な量には圧倒されてしまった。当時5万冊と言われた湖南の蔵書は、京大人文科学研究所や杏雨書屋、その他の公的機関に分蔵されはしたが、現在本学図書館で目録作成中の漢籍善本のコレクションは推定3万冊を超える。今回展示することのできた『文史通義稿本』（清・章学誠撰）をはじめとして、湖南の学識と鑑識眼によった善本が殆どであり、湖南の自筆書き入れ本も少なくなく、湖南の学問を知るためにも極めて貴重なものである。

蔵書以外にも原稿類、書簡、写真、調査資料写真原版等、湖南の関わりの深いものが数多く残されている。なかでも、原稿類やメモの多き



企画展パンフレット

に驚かされる。やや縦長の流麗な書式でびっしりと書き込まれているノートが何冊も保存されている。当時の有識者としては当然のことかも知れないが、全て漢文で書かれてある。

湖南の書は晋唐の正当派を宗とし、書家としても非常に名高い。今回の展示にあたり、湖南



展示風景

の書風を紹介したく数点の色紙を展示したが、小品とはいえ上品さを醸し出す作品である。湖南遺愛の硯や筆、文房具を額装した書の回りに配置してみたが、展示としてはいかがなものだろうか。湖南の書に触れ、それが書かれたであろう筆を手にした筆者の緊張感を感じてもらえたら幸いである。

「緊張」といえば、博物館に収蔵されているものはどれも唯一無二のものであり、直接手に触れるときはかなり緊張するものであるが、昭和6年の「御進講」の原稿を手にとったときはそれも一入であった。当時、湖南自身も非常に喜んだといわれている。この原稿は文具コーナーにさりげなく置いたが、当日持参したと思われる原稿だけでなく、丁寧に保管されていた宮内庁との連絡書簡をはじめ、下書き2点も並べ

て展示した。「東洋史家」として頂点を上りつめた湖南ではあるが、天性の素質ばかりではなく、その陰に隠れた努力をかいま見ることが出来たと思う。

湖南はその生涯に13回の訪中と1924年には欧州旅行を行っている。度重なる中国視察などに使用した旅行カバンを2点展示させていただいたが、そのうち1点の内ポケットから、胃薬が1服だけ出てきた。1933年（昭和8年）10月湖南最後の旅行となった満州へ持参したものと推測される。明けて2月に京大病院で本人には胃潰瘍と告げられたものの、胃ガンと診断されたことを考えれば、当時、「日滿文化協会設立のために病軀をして渡満」の伝記の記述に胸打つものがある。昭和9年4月に前年10月訪中の返礼として鄭孝胥（1860—1938。「満州国」総理、清朝の遺臣。1882年拳人）が恭仁山荘を訪問、談笑した後、5月に吐血、6月26日午後1時に、逝去した。享年69歳であった。

今回の展示会は、当館にとって「個人」に焦点をあてた初めての展示であった。時間的な制約もあって、当初はどこまで「内藤湖南」の人物像に近づけるか不安を感じたが、観覧者に判断を委ねることとし、湖南の遺愛品、未公開写真等を客観的に展示することに終始した。

開館日数23日、入館者数1537人。期間中に多くの方に見学していただけたことをお礼申し上げます。

また、展示にあたってご協力いただいた本学総合図書館ならびに折に触れ湖南のエピソードをお話下さった奥村郁三教授に深く謝意を表したい。



展示 No.11 五岳真形図形（白銅製）



展示 No.25,27,41 湖南遺愛の筆及び文硯



展示 No.16 竹垞硯（木堂遺愛品）